

佐高信  
経済評論家

『文藝春秋』二〇一二年新年特別号に「オリンパス元社長の告白」が載っている。追放された同社の元社長でCEOだったM・ウッドフォードのそれである。

ワンマンの前会長、菊川剛から、

「私は思ったように会社を変えることができなかつたが、あなたならできると信じている。引き受けてくれるか」

と言われて社長に就任したウッドフォードは、菊川の考える方向ではなく、会社を変えようとして解任された。

その間を暴いた『FACTA』という雑誌

「親分、なぜ、一言、死ぬとおっしゃって下さらねえんですか」

となる指摘している。

社長という役割で部下を「コントロールしているのではなく、社長という身分が社員を支配している。上司と部下の関係がほとんど親分子分のそれになるのである。

だから、部長あるいは課長の引越しい、部員や課員が駆けつけて手伝うことがおかしいと思われない。仕事を離れても、上役下役の関係が続くのは、役職が機能ではなく身分となってしまうところと同一である。

ドは次のように憤慨する。

「信じられないことだ。証拠の隠滅が行われない可能性がどこにあるというのだ。私は、すべての社内システムからアクセスを拒絶されたというのに」

なぜ菊川のような人間がトップになり、こうした不正をやるのか。

ウッドフォードはその原因の一つを「あまりに静かな株主」に求める。

オリンパスの不正な買収が表に出てから、欧米の機関投資家やファンドは、公の場で取締役の退陣や情報公開を徹底してやるよう要求してきた。その一方で、過半数を占める日本の株主は黙ったままである。

これは株式持合いの弊害ではないか、とウッドフォードは指摘する。つまり、相身互いで会社同士、批判し合わないのだ。

オリンパスにおいて菊川は絶大な権力を誇っていて、自分以外の人間が菊川に異論を唱える場面を一度も見ることがない、とウッドフォードは回顧している。

「私が社長に復帰したら、アメリカ型の強力な社外取締役制度を導入するつもりだ。社長に対して強い発言権を持ち、経営の舵取りを監視する役割を担ってもらおう。また、フレッシュで有能な人材も登用していきたい」

これがウッドフォードの提言と抱負である。それにしても『FACTA』が書くまで、どうして『日本経済新聞』をはじめとしたメディアはその秘密を暴けなかったのか。癒着しているからか、それとも無能だからか？

## ただのタブロイド・ジャーナリズムが暴露 オリンパス問題を報道しないメディアの墮落

を菊川は「ただのタブロイド・ジャーナリズム」と一蹴し、菊川と同じ穴のムジナの財務担当副社長、森久志は、

「森さん、あなたは誰のために働いているのですか」

と尋ねたウッドフォードは

「菊川会長がね」

と答えたところ、日本のヤクザ映画と西部劇の違いについて、映画評論家の佐藤忠男が、西部劇では、

「插图は受けねえ」

とウツセリフが多いのに、ヤクザ映画では、

会長になってもCEOの座を譲らない菊川に対して、社長となったウッドフォードがそれを求めると、菊川が怒鳴り出したので、ウッドフォードは「私に対して怒鳴りつけるな。私はあなたの走狗じゃないんだー！」

と言い返した。彼らが絶対に露見しないだろうと自信を持っていた同社の不正が暴かれ、菊川も遂に十一月二四日に取締役を辞任せざるをえなくなった。

ところが、菊川らが不正を認めた後も出版社にいたという。それについてウッドフォー